

3月、日本経済新聞社の電子版（※）に市長インタビューが掲載されました。タイトルは、「住みやすい町、日本一 『究極の地方創生』はこれだ！」。

記事では、市長が目指している遠回りしても、失敗してもいいから市民と一緒に考えて地域づくりの有り様を、市長就任前の商社マン時代や幼稚園や高齢者施設などでの「時間に追われない国」作りの経験などにも触れつつ、紹介されています。

こうした「つながり、思いやり、支え合う地域を作り上げていく取組み」は、「自治」の力を失いかけた自治体にとって、「地方創生」に向けた根源的な取組みと紹介されています。

※日本経済新聞電子版の閲覧には、会員登録が必要です。

掲載後、反響は大きく、さまざまなメディアから取材依頼が舞い込みました。しかし、私たち職員は、こう思うのです。

「今の長久手のどこが、究極の地方創生なの？」

「吉田市長の理念、目指す長久手像が、評価されているだけで、市の現状は、職員も市民もそれに追いついていない。あの記事を読んだ人は、長久手では既に成果が上がっていると思わないか？」

「市民を巻き込んだ取組みは、他市町の方が進んでいるのに、なぜ長久手が取材されるのか？長久手は他市より遅れているくらい。大々的に取り上げられては、先進事例の市町に失礼だ」

「とにかく、まだ、何もかもが始まったばかり。何も成果がない。人集めにすら苦労している」

「胸を張って話せることが、まだ何もない…」

自治体だからこそ、遠回りしても議論ができる

市長が、以前、市を取材した別の記者さんに「何に興味があって、取材をしてくださるのですか？」と尋ねたところ、その記者さんはこう答えられたそうです。

「他の自治体は、住民サービスと言って、効率を良しとし、成果が一番重要視される。一方、長久手市長は、『遠回りしてもいいから、市民と一緒に考えよう』と言っている。そんなまちは、日本中どこにもありません。だから面白いんです」と。

市長が、就任当初、「失敗してもいい。遠回りしてもいい」と発言されたとき、職員の多くが「市役所は、税金を使っているのに、失敗してもいいとは何事だ！」と反発したものです。私もその一人でした。

「失敗してもいい。遠回りしてもいい」のは、「市民と一緒に考えて考えることに關しては」だと分かったのは、市長が就任して随分経ってからでした。

それが分かったとき、それまで理解できなかった市長の目指す方向が、少しだけ見えた気がしました。でも、今回のことで、まだまだ市長の想いを理解しきれていなかったことを痛感するのです。

日経新聞電子版の掲載直後、別の新聞社の市長インタビューに立ち会いました。

その記者さんは、取材の理由を、「今、長久手でやっていることは、大都市でも過疎のまちでも当てはまることで、自治体というより、市民に対して、人口が減少しても維持していけるまちとは？のヒントになると思った」とおっしゃっていました。

事前に、私から記者さんに対して、長久手は人口減少で悩む自治体とは、少し違う次元の悩みを抱えて試行錯誤していることや、まだ何も成果が出ていないこと、でも市長は、「市民と職員と一緒に考える取組みを始めて、人の集め方、話し合いの方法などが上手くいかず、形にならず、みんな悩んでいるけれど、それは、市民と職員が自ら考え、自らが行動するための準備をしている最中だから、それでいいんだ。それがいいんだ。上手くいかないなら見直せばいい。以前は、『上手くいくはずないから、やらないでおこう』、『市がすべてやってしまおう』という風潮だったのに、苦勞してでも市民と一緒に考えるという第一歩を職員が踏み出したことが素晴らしいと思っている」ことなどを説明させていただきました。

取材は、子どもは「時間に追われない国（地域社会）」に住んでいて、学校に通うことで「時間に追われる国（会社・役所などの組織）」に行く訓練をする。退職し、再び「時間に追われない国」に帰る必要があるのに、「時間に追われる国」の価値観をそのまま地域社会に持ち込むから、話がややこやしくなるという話に始まり、人は、役割と居場所があるところに自然と集まるから、リタイア後の男性に役割と居場所があり、褒めてもらえる地域を作ることができれば、それが地方創生だというような話で進みました。

そして、「遠回りしてもいい。失敗してもいい」と言っている理由として、自治体には倒産の心配がないことがあるとおっしゃっていました。

民間であれば、1カ月に3日休むと、売上が1割減ります。月末の手形を落とすために、会社を存続させるために必死に稼ぐ必要があるので、効率と成果が求めら

れます。一方で、自治体にはそうした苦勞はありません。倒産の心配がない自治体だからこそ、みんなで考え、悩み、議論して、遠回りしてでも物事が進めることができるはずだと。

「成果がないからダメ」という認識は間違っている

数日後、在京のテレビ局から取材がしたいとの打診がありました。副市長とも相談し、市長に「目に見える成果が、まだ出ていません。他の自治体のヒントになることは、まだ長久手にはありません。というより、先進自治体に失礼です。時期尚早だと断りましょう」と伝えました。

すると市長は、「(取材を受けることを) 考えてみてはどうだ」と言うのです。正直、その答えに私は驚きました。そして、いつになく強い口調でその理由を話されました。

“まだ成果がないからダメだという認識は、間違っている。成果が大切なのではない。今までやったことがないことにチャレンジする第一歩を踏み出したこと、成果はまだ出ていないけれど、市民と一緒に考えて、悩んでいることが、きっとマスコミのみなさんは興味深いだろう。それはすでに完成している自治体にはないことだから。そんな「まだ何も成果がない長久手」が、取材対象になるかならないかは、相手が決めること。

昔、ゴジカラ村で「時間通貨」という取組みを始めたとき、担当者は、今のあなたたちと同じように「まだ人が集まっていないのに、取材は困ります」と言っていた。そのときも私は、「人が集まっていることが大切ではない。始めたことが大切なんだ。『始めました。まだ、私一人ですが頑張ります』とさえいいんだ」と伝えた。それと同じなんだ。

私に一番近くにいるあなたたち（副市長、政策秘書課職員）ですら、「まだ成果がない」という考え方ならば、他の職員、市民も同じだろう。であるならば、取材を受けることで、『自分たちが今やっていることは間違っていないんだ。そういう時代になってきたんだ』と市民も職員も確認することができる。これをチャンスと捉えている”と。

他地域の方には、ワークショップも新鮮に映る

市民と一緒に考える事業に携わったことがある職員は、みんな「どうしたら人が

集められるか」「市が望む答えと違う方向の議論になったらどうしよう」「何回話し合っても、ちっとも前に進まない」などと悩んでいるはずです。

私自身、福祉課が実施する「支え合いマップづくり」に地域住民として参加していますが、開催チラシを地域の全世帯にポスティングしても、個別に声をかけても、参加者が片手の人数しか集まらなかったり、議論が地についていなかったりして、めげそうになります。いつまでも福祉課の職員が休日出勤して地域住民の話し合いに参加しているのも不自然だし、かといって地域住民だけでは自然消滅してしまいそうだし…。と悩みは尽きません。

そのことを市長に話したら、「まだ半年、そんなすぐに思い描くように進むわけがない。あなたは、まだまだ「時間に追われる国」の住民だなあ。とにかく地道に続けること。いつか花が開く」と言われました。

一方、先日行われた「市政学び舎」での「幸せのモノサシづくりワークショップ」に、関東から参加した方からは、「あのワークショップの手法、素晴らしいですね。さっそく自分が講師を務める講演の際にやってみましたが、いろんな意見が出て楽しかったです」と言われました。

今の長久手では、議論の場では、ワークショップ形式で行うことが多く、机の上に模造紙が乗っているだけで、「はいはい、またワークショップね。付せん意見を書けばいいでしょ」みたいに、職員も、市民もワークショップ慣れ、ワークショップ疲れをしている節がありました。

そのため、最近では、「フューチャーマッピング」という聞いたこともない手法を取り入れたり、「ワールドカフェ」の手法を取り入れたりして、あれやこれやと工夫をして議論を重ねています。私たちが、日常的に行っているワークショップ形式が、ほかの地域の方からみたら「あれはいいですね」と言われたことに驚きました。

なぜ、長久手を取材するのか

なぜ、長久手を取材したのか、不思議でならない私は、先述の2人の記者に質問してみました。

お一人の記者さんは、

「『市長の言っているとおり、市民や職員、議会の反発もなく動いている』なんて気持ちが悪い。反発もなく、その通りにやれているなんて誰も思っていない。市役所に勤めている人は、往々にして真面目できっちりしている人が多いのに、市長の言う「失敗してもいい。遠回りしてもいい」にチャレンジしていることが素晴

らしいと思います。プロセスが大事で、市民と職員が一緒に考える努力をしているところがいいんです。失敗したとしても、それをさらけ出すことが、他の自治体の刺激になるのです。

実は、読者は、誰も成果を求めていなくて、そこで生まれる「つながり」を求めているのかもしれない。これまでマスコミは、画にならないとニュースにしてこなかったけれど、今は、画にならない、形にならないものを取り上げようという風潮に変わってきています。世の中の片隅で起きている小さなことを取り上げ、伝えることで大きな力になると感じ始めているからだと思います。

みんなが、上手くいっているところに、実は、真実がないことを見抜いているのかもしれない。失礼ですが、長久手は平凡なまちです。その平凡な長久手の取組みは、全国どこにでもあるまちの刺激になるのです。何が失敗なのかは、長久手市が決めることではないと思っています」

もう一人の記者さんは、

「コミュニティ作りは自治体間で競争するようなテーマでもないと思いますし、先進自治体などありません。

どこもかしこも試行錯誤しているわけで、長久手のやり方がそのまま通用することはない、その試行錯誤を伝えることがこれからの住民の選択につながると私は思っております。だから取材をさせていただきました。」

副市長は、副市長なりに市長の思いを考えるに、「これまでの自治体は、議論を深めることなく多数決で決めてきた。これからは多数決で決めるにしても、反対する人にも理解を求め、歩み寄り、みんなが納得するだけの議論を重ねてから決めていくことが求められるんだろう。これまでの自治体にはこの辺が欠けていたと思う」とおっしゃっていました。

もしかすると、多くの自治体にも欠けていた「みんなが納得するだけの議論を重ねることの必要性」に気づき、市民と一緒に考えようとしていることが、マスコミには新鮮に映るのかもしれないと私自身、思い始めています。

そして、私は、誰よりも市長の話聞き、意見を交わしていながらも、まだまだ市長の目指している方向を理解しきれていないことに気づきました。

先日行われた市長と課長級職員とのミーティングの際にも、「市長の思い描く長久手像を職員が理解共有できていない」という意見がありました。マスコミの記事を通して市長の想いを知るのではなく、もっともっと、市長と職員が直接話をする機会を作り、将来の長久手像の共有を図っていきたくと思っています。